

# 勇魚 ISANA

Oct. 1991 No. 5

## 目次

- 「捕鯨を守る会」会長就任に際し . . . 1  
米澤邦男  
日本水産(株)顧問
- 第43回IWC年次会議報告 . . . 2  
後藤 暁  
水産庁海洋漁業部参事官
- 鯨と私 . . . 4  
清宮 龍  
政治評論家  
内外ニュース社長
- 捕鯨問題に関するロス・アンジェルス市民の反応ぶり . . . 6  
小林裕幸  
林野庁森林組合課 課長補佐
- 外国人ジャーナリストの見た日本の調査捕鯨 . . . 8  
サイモン・ウォード  
フリージャーナリスト
- IWC総会プラスパフォーマンス . . . 11  
大西睦子  
鯨料理店・徳家経営
- ナンタケットの鯨博物館 . . . 13  
石津謙介  
ファッションコンサルタント

## ごあいさつ

### 「捕鯨を守る会」会長就任に際し

米澤邦男

日本水産(株)顧問

今度、故長谷川秀雄氏の後を受けて、守る会の会長に就くことになりました。偉大な先輩の後だけに荷が重い感じがしますが、会員の皆様の力を拝借しつつ、重責を全うしたいと願っています。さて、今朝、新聞で面白い記事を見つけました。公海流し網問題の交渉の中で、米国の政府高官が、島水産庁次長に、「この問題は牛のスタンピード（大暴走）のようなもので、もう（行政府として）抑えようもない。」と言ったということです。典型的な逃げ口上ですが、同時に国内世論の反対には、客観的に正当化できる理由はないと告白しているようなものです。スタンピードといえは、一九七二年の国連人間環境会議での捕鯨十年禁止決議も、こうした大暴走の産物であり、牛 - ここでは各国の代表団ということになります - がみた恐怖の正体は、米国や環境団体が担ぎ廻った張りぼて朱塗りの魔物でありました。しかし、幻は幻、時とともにその正体は明らかになり、倒々今年のIWCでは、あろうことが彼等の送りこんだ科学者までもが、資源を痛めずに合理的に利用できるという当たり前すぎる結論を証明してしまいました。もっとも、こんなことにひるむ暴走屋ではありません。ニュージーランド政府は、二匹のどじょうを求めて、明年六月の国連環境開発会議に捕鯨の十年禁止決議を提案することを決めました。投票で決着をつけるといきまっていますが、提案文書の中で奇妙なことをいっています。「IWC ha, 明年、資源の新管理計画を採択する運びであるが、そうでなければ捕鯨の再開と南半球ミンク鯨の組織的乱獲を招く。IWC条約ではこれを妨げない。」見え見えの嘘と恫喝、呆れるばかりです。これでは、まるで、理性の通じない人を相手にするようなものといいたくなりますが、明らかに科学と、正義はわが方にあり、又、先も大分見えてきました。会員の皆様と力を合わせ、大いに頑張りたいと思っています。

## 第 4 3 回 I W C 年次会議報告

後藤 暁

水産庁海洋漁業部 参事官

### 1. はじめに

第 43 回国際捕鯨委員会(IWC)年次会合は、5 月 27 日から 31 日まで(科学小委員会は 5 月 10 日から 20 日まで、各種分科会は 5 月 22 日から 25 日まで)アイスランドのレイキャビクで 30 力国が出席し開催された。我が国は、東衆議院議員、新盛衆議院議員、松浦衆議院議員、島コミッショナー(水産庁次長)を始め、48 名の代表団でこの会議に臨んだ。

### 2. 科学小委員会及び各種分科会の概要

科学小委員会では、実際に資源管理に適用する際の利便性から C 方式(クックが提唱)が多数の科学者の支持を得て、本会議に勧告された。また我が国沿岸小型捕鯨の対象鯨種である北太平洋ミンク鯨資源包括的評価が行われ、我が国沿岸小型捕鯨の対象鯨種であった北太平洋・オホーツク海系群の資源量が 2 万頭以上、年間増加頭数約 200 頭であることが多くの科学者の支持を得た。

沿岸小型捕鯨を検討する分科会で我が国は、原住民生存捕鯨に準じた沿岸小型捕鯨の地域社会における社会、文化、経済的意味での重要性を主張し、これにデンマークが賛同を示す等の進展が見られ、本件は継続して審議されることとなった。

### 3. 本会議の概要

#### (1) 管理方式とモラトリアムの見直し

我が国、ノールウェー、アイスランドは、本会合で科学小委員会の勧告が正当に採択されるべく管理方式に関する科学小委員会勧告を採択する決議案を共同提案した。しかし、投票に付された結果、同決議案は否決された(賛成 7、反対 19、棄権 3)。一方、豪、フィンランド、独、オマーン、蘭、セイシェル、スイス、英、米が科学小委員会で勧告された C 方式を更に保護主義色を強めた変更を余儀なくさせる決議案を共同提案し、投票により可決された(賛成 18、反対 8、棄権 5)。

アイスランドは包括的評価が終了した北大西洋ミンク鯨、同ナガス鯨の捕獲枠を要求し投票を求めたところ、本提案を投票に付すことが不適當であることが投票により可決されたため(賛成 15、反対 7、棄権 6)、捕獲枠要求の投票は昨年同様なされなかった。

ノールウェーは包括的評価が終了した北大西洋ミンク鯨の資源分類を保護資源ではなく未分類にするよう投票を求めたが、否決された(賛成 4、反対 18、

棄権 6)。

#### (2) 鯨類捕獲調査

昨年同様、我が国の調査計画に対し再考決議が提案され、我が国は科学小委員会の建設的な意見を基に調査計画を見直すことを表明し、コンセンサスで採択された。

ソ連の調査計画に対し、調査の中止を求める決議案が提出され投票に付された結果採択された(賛成 20、反対 4、棄権 5)。我が国は、決議の法的正当性の観点からこれに反対した。

#### (3) 沿岸小型捕鯨

我が国は、科学小委員会で得られた成果を引用しながら 50 頭のミンク鯨緊急捕獲枠を要求した。投票に付された結果、否決された(賛成 6、反対 14、棄権 9)。

#### (4) 小型鯨類

小型鯨類は IWC の管轄下にはないものの、科学小委員会で昨年過剰捕獲であるとして非難が強かった日本沿岸イシイルカの資源量が約 44 万頭であることが合意され、また我が国は捕獲削減努力を続ける等誠実な対応を取ってきたことも本年はある程度認められた。しかしながら、イシイルカについてもなお捕獲量の多さが懸念されており、また追込み網漁業を来年集中的に論議することとされ、予断を許す状況ではない。

### 4. おわりに

本年は、1982 年に決定された商業捕鯨モラトリアムを見直すための鯨類資源包括的評価、及びモラトリアム見直し後の新しい鯨類資源管理方式(捕獲枠の計算方法)の確立が最大の焦点であった。

科学小委員会では、特に管理方式に関する建設的な結論として 1 つの方式が選択されたことは特筆できる。実際、同小委員会では、本年特に純粋な科学的議論が展開される傾向が強くなり、科学に基づかない極端な反捕鯨的主張は排除される動きも見られていた。

しかし、本会合では数で勝る反捕鯨諸国が科学的というよりむしろ政治的な理由から捕鯨再開に反対し、最終的には数の力でも押し切る構図となった。特にアイスランドはこのような会議のあり方自体を非常に問題視し、会議閉会時に脱退を自国政府に勧告する旨を表明するに至っている。

反捕鯨側は、大型鯨類の保護をほぼ完了させたとして、次の目標を小型鯨類(いるか類)においているとともに、また、モラトリアム解除の遅延のために、鯨の捕殺方法の人道性の問題を大きな柱として取り上げる動きを見せていることも注目される。

## 鯨と私

清宮 龍

政治評論家

内外ニュース社長

私の少年時代には子供たちの心はずませ夢をかきたてるようなものが沢山あった。

いまは、社会や環境がすっかり変わり少年たちもずい分現実的になって心に夢をえがくことも少なくなったように思う。

さて、私が少年の頃、なんととはなしに胸をおどらせたものの一つは、満鉄の特急「あじあ」号である。といっても実際に乗ったわけでも見たわけでもない。

ただ満州の見渡す限りの高粱畑の中を轟進する「あじあ」の雄姿、少年雑誌の写真や挿絵で、それを見るだけで私の胸はおどった。「あじあ」には人間の素晴らしい知恵と先端を行く科学技術、そして力強く発展する日本の新しい時代をみる思いだった。

もう一つ、私の夢をふくらませてくれたのが捕鯨母船「図南丸」である。

遠く南氷洋に巨大な白ながす鯨の群れを追う「図南丸」。東京駅よりも大きいというこの船の写真も、よく少年雑誌のグラビアや誌面を飾っていた。「図南丸」は海洋国家日本を象徴し、海外に雄飛しようとする国民の高揚した気持ちを示しているようだった。

やがて戦後となり、駆け出し記者時代、毎晩のように通った一ぱい飲屋で突き出しに必ず出てきたのが、いまはほとんど見る機会のなくなった鯨の“おばいけ”である。

鯨はもっとも大衆的な食料の一つだったわけだ。

その後福岡に住んでいた頃「尾の身」の味を覚えた。

すでに昭和も40年代の後半に入り、「尾の身」はだんだん貴重品になりつつあったが、それでもまだ食料品店でよくみかけたし、値段も一般市民の手の届く範囲内であった。

かつては夢につながっていた鯨が、こうして食という現実を通じ私にとってきわめて身近な存在となった。

ところが昭和50年代に入ると、その鯨が国際的圧力で捕獲を制限され、このままいくと遠からず口に入らなくなるだろうと言われた。捕獲反対を主張する国々は、乱獲で鯨が絶滅に瀕しているというのだ。しかし、日本の科学者達の良心的調査では、決してそんなことはないという。

こうした状況を聞くうちに、多年日本民族が親しんできた食文化の一つを、

なんとか守りたいという気持ちになった。

思いを同じくする友人たちがいて、小規模ながら各界にまたがる捕鯨問題懇談会ができた。悪戦苦闘する政府間交渉を外から応援しようというのである。

その結果国際捕鯨委員会の年次総会にもオブザーバーとして何度か出席し、英、米をはじめとする反捕鯨各国の政府代表や政治家、あるいは動物愛護団体、自然保護団体代表など、さまざまな連中と議論し、激しくやりあったこともある。

ただ対決姿勢一本槍では多勢に無勢で票決になると決まったように数の力で押し切られてしまう。三十数票対一(日本)と余りにもみじめな票差に愕然としたこともあった。

そこで反捕鯨に凝り固まった先方の世論をどうしたら軟化させられるか、日本にとって少しでも有利な妥協の道はないか といろいろ模索するのだが壁は厚く、日本はじりじりと後退を余儀なくされ、最後は周知の如く全面捕鯨禁止へ追い込まれてしまった。

早いもので、あれからもう四年になるが、最近OECD代表部の梶川幹夫という人が、そこでの各国代表の発言ぶりを紹介した一文を読み、IWC総会でのやり切れない思い出が改めて蘇ってきた。

“英国代表の発言は修辞たっぷり、ある国の発言に反対するときでも、まずその見解を誉めたうえでおいて賛意を表するかにみえて最後にストンと落としてくるから要注意。フランス代表の発言はジェスチャーたっぷりで長々と続き、これをどんな内容のときでもやる。

提出物が間に合わずすみませんという趣旨の大演説を聞かされたこともある。アメリカ代表は本国からの訓令にしばられているようで自国に関係ないテーマでは静かにしているが、いったん訓令の届いている項目になると態度が一変し、けっこうガチガチの発言をしてくる...”等々。

国民性とはおそろしいものでIWCでも各国代表の発言には同じような傾向がみられる。

ただしIWCの場合は、その上に“鯨はかわいい。頭のいい哺乳動物だから殺すなどもってのほか・”といった狂信的国民感情が加わっているのだから一層始末が悪い。本来、われわれよりも合理的物の考え方をする彼らが、こと鯨となると科学的調査に基づいた数字よりも、こうした感情の方を優先させて日本叩きに足並みを合わせる。

理不尽だが現実に厚く横たわるこの壁。どうしたらこれを突破し鯨という食文化を守り抜くことができるのか。客観情勢は不利だ。しかし決して諦めることなく、西欧文化との共存共栄という視点に立って対応策を考え、粘り強く、しかも果敢に、それを打ち出していくべきであろう。

## 捕鯨問題に関するロス・アンジェルス市民の反応ぶり

小林裕幸

林野庁森林組合課 課長補佐

年の暮れが近づくと、ロス・アンジェルス総領事館に勤務していた昨年までは、毎年 11 月からの数か月間、電話が鳴るとそれだけでうんざりした気分になっていたことを思い出す。

顔の見えない相手と不得手な英語で会話をするだけでその理由ではない。11 月には、調査捕鯨の開始が報告され始め、環境団体が反捕鯨のキャンペーンを本格化させるため、捕鯨に抗議する市民の電話が次々とかかってくるようになるのである。しかも、相手のセリフは、「鯨は絶滅の危機に瀕している。」、「知能の高い野性動物であり、最大の哺乳動物である鯨を殺すのは、野蛮な行為である。」、「日本の捕鯨は国際条約に違反している。」、「調査というのは名目にすぎない。」、「300 頭は多すぎる。」等々ワンパターンである。

アメリカ人は、一般に議論好きで、しかも簡単には自説を変えない人も多い。だから、こちらがいくら丁寧に説明してもなかなか納得しないし、ある論点について自分に分がないことに気づくと「anyway(それはさておき)」と言って別の論点を次々と繰り返してくる。そして最後には、感情が高ぶってきて「嘘だ！」などと言いついてくることもある。また、「牛や豚も殺してはいけない。」という肉食主義者の抗議もなかなか手ごわい。このような電話の相手を毎日していると、「もしやアメリカ人全員が捕鯨絶対反対派ではあるまいか？」と思えてくる。そこで、論より証拠、職場の同僚ブライアン・スウォーズ氏に、ロス・アンジェルス住民に対する電話によるアンケート調査と同氏の友人・知人に対する面接による調査を 1991 年 5 月に実施してもらった。今回与えられた紙面の関係から、その詳細はここでは紹介できないが参考までに調査の概略を示しておこう。

電話調査は、ロス・アンジェルス西部地域の住民 74 名を電話帳から無作為に抽出して、捕鯨問題を中心に合計 15 項目について実施した。この調査は、実施地域が偏っており、厳密な統計的手法を用いたわけでもないのに、統計的価値はないかもしれないが、私の疑問にはある程度答えてくれるものであった。その結果の概要は次のとおりである。

環境団体の活動に対する支援等を行い環境問題に熱心に取り組んでいる人が、46%いる。

野性動物の保護は、他の環境問題に比べて緊急度が高い問題とは意識されていない。

「食物とするために野性動物を殺すことが認められる場合がある」と答えている人が 58%いるのに対し、「一定の範囲であれば捕鯨が認められる」と答えている人は 19%しかおらず、鯨に対しては他の野性動物とは違った感情を持っている。

「国際管理により総頭数を維持する」との前提をつけると、捕鯨を認める人が 30%に増えるが、それでも、捕鯨反対派の 40%より少ない。(残りの 30%は中立)

環境運動に熱心な人は、そうでない人に比べ、野性動物の捕獲や捕鯨に反対する傾向が明らかである。

捕鯨に反対する人の理由は、「知性が高い」、「必要がない」、「危機に瀕している」、「道徳的でない」、「残酷」等の順に多かった。

逆に捕鯨は認められるとする人の理由は、「捕鯨が一定の範囲に規制されるのであれば問題がない」、「他の動物が認められ、鯨だけが禁止される理由がない」、「伝統文化なら仕方ない」等の順に多かった。

調査対象地域が、環境運動が活発なロス・アンジェルスの中でも特に環境問題に関心の高い人が多いと考えられる西部地域であったこともあり、調査実施前は、捕鯨を認める人はほとんどいないのではないかと思っていた。しかし、一定の範囲であれば捕鯨を認めるとする意見が約 2 割あり、さらに総頭数を維持すること等の前提をつけると捕鯨容認派の数が 3 割に達していることが分かったことは、収穫であった。

面接調査は約 30 名に対して行ったが、対象者が所得、社会的地位、学歴とも平均的アメリカ人よりはるかに高く、環境問題への関心が強い人々である。このため、電話による調査より更に偏りのある調査であるが、一応その結果の概略も紹介しておこう。

ほとんどの人が、高い知性等を理由に捕鯨に反対している。

しかし、同時に、多くの人は公海の鯨については厳密な資源の監視と管理がなされるなら捕獲も止むを得ないと考えている。

現在、国際捕鯨委員会による管理が行われていることを知っている人はほとんどいない。



## 外国人ジャーナリストの見た日本の調査捕鯨

サイモン・ウォード

フリージャーナリスト

捕鯨船員との最初の出会いはぱっとしないものであった。1990年11月下旬のある真夜中、私は横浜に停泊中の第三日新丸の船上に上がった。この船は往復5カ月におよぶ南極航海のあいだマイホームとなるところであるので、生活道具を運び込んできたのだった。誰かいないかと暗闇の中をのぞき込んだが誰もいない。ドア口に何かかぬっと動いたような気がしたので調べにいった。私がこの世で最初に出会った捕鯨船員は小用を足している最中であつた。邪魔してはいけないと思い終わるのを待った。小用を終えた彼は振り返り、私の方を見た。

「ノー、ノー、ノー！」

彼はそう言うと私の横を強引に通り返しようとした。やっと見つけた船員にここで逃げられてはと思い、私も懸命に道をさえぎった。

「おまえらみたいな奴とは話さん。」

彼はそう言った。私の服装を見て環境保護団体の回し者だと思つたらしい。だから彼にこう説明した。

「環境論者だけではなくてジャーナリストもジーンズとスニーカーをはきます。私は後者のほうでジャーナリストです。それだけじゃありませんよ。私もこの船に乗り込むことになっていますから、

私たちは仲間みたいなもんです。」

そういうと彼はやっとなズボンのチャックを上げすり足で航海士を呼びにしてくれた。外国人のジャーナリストは勿論、日本人のジャーナリストでさえ何年も航海に参加していなかったのだから戸惑うのも無理はなかった。

私への対応は第2の捕鯨船員に引き継がれた。彼はズボンを上げながら私に挨拶してくれたが、おそろしく泥酔しているためかズボンがなかなか上がらなかった。わたしはこの最初の経験で得た知恵その1は「深夜以降停泊中の船に乗り込むことは禁物である」というものであった。

その夜の不幸はこれで終わったわけではなかった。荷物をかかえて木製デッキの上を歩いていたら、片足が突然床板の下に消えたのである(このときのむこうずねの傷は今も立派に残っており思い出を刻んでいる)。数日前にきいた忠告

がこのとき突然胸によみがえった。「グリーンピースが船を沈めに来るなどという心配は無用です。自分で沈みますから。」というものであった。

しかし、時がたつにつれて、このサビだらけの老巧船は私の心の中でいつしか生きた博物館に変貌していた。それ故この船が今年スクラップになることを知った時はショックだった。第三日新丸は 1947 年に建造され、それ以後 1961 年までノルウェー国旗のもとで航海を続けた。今日まで何十年も修復を重ねてきたことを思うと、機関装置類には、サビと幾重にも塗り重なった塗装の下で、少なくとも 5 カ国語以上のマーキングが見られるだろう。底部の船体壁からブリッジハウスの最上階まで 10 階建てになっており、迷路のように奥まった角が数え切れなくらいたくさんある。航海中の半年間で随分と探検してみたが半分見たかどうか自信がない。誰もほとんど立ち入ることのない所には、きっと何十年も前に販売中止になった煙草の空箱やビールの空き缶などの骨董品が埋もれていることだろう。

出航 10 日後、私は最初の、そしてありがたいことに航海中一回限りの、下船願望にとりつかれた。私の部屋は、熱帯の太陽が照りつけてうだるように暑く、しかも塗り立てのペンキの臭いがたちこめるので、もどしそうになっていた。私はなんとか体調を整えようとよるめきながらデッキにでて海のかなたの何かを見ようとしたが、海また海で海以外の何物もそこにはなかった。このとき、私は、発作的に、閉所恐怖症と広場恐怖症があわさった恐怖感におそわれ、よるめきながら急いでペットにもどった。それから約 10 日後、ついにわたしたちは南極に到着し、作業を開始した。これは天恵ともいべきものであった。大先輩には「解剖」は単なる作業以外のなにものでもなかったであろうが、私にはみじめにやせ細った筋肉に活をいれる絶好の機会であった。自分用にあてがわれた「長手鉤」で武装した私は、帯状の脂肪層を切断機に投入する修行を重ねた。よく働いた日には誰かが肉のかけらを投げってくれるので、それを刺身にして冷えたビールで喉に流し込んだ。一缶では流しきれないので六缶で流し込むこともないとはいえなかった。

やがて私は「スキスキ」から実際の解剖まで、なんでも一度は挑戦するようになった。なかでも気に入ったのは、解剖長の内蔵切開の手伝いだった。血液が飛び散り排泄物がふりかかってくることもあって、解剖長がスムーズに切り進めるよう「長手鉤」を要領よくあてるには相当の熟練と知識を必要とした。

楽しみにしている解剖が何週間もないことがあり、そんな時は、生活に意味を持たせるため自分に目標を課すことにした。まず禁煙である。これは何度もやった。夕方にはデッキにでてバットを振ったりカーブボールの完成に専念し

た。暮も習いはじめ、通信士の人と何度か対局もした。これについては、師匠に敬意を払って、私は最後まで彼が何をやっているか私が全く理解していないことは黙っていた。

もちろん私がこの航海に参加した本当の目的は鯨の肉の切り方を習うためでも、海上での五ヶ月間のサバイバルの方法を学ぶことでもなかった。私は鯨類研究所の研究者が行う科学調査を実地見聞するジャーナリストとしてやって来たのだ。彼らは研究をし、そして立派にやった。しかし率直に言って、そうするのが当たり前であり、もしやらなかったら私は驚いただろう。彼らの研究が、環境論者がいうように、単に口実にすぎなかったら私は間違いなくここに招待されなかったに違いない。

私はまたBBCのためのフィルムも撮った。これはニュースドキュメンタリーに使われている。私がフィルムにおさめたうちで最も視覚的効果に優れていたのはタスマン海でのグリーンピースによるデモであった。彼らは派手な塗装を施したヘリコプターやゴムボートに乗って、エンジン音を響かせながら周回し、旗をなびかせ、がなり立てた。彼らは私たちに手を振り、私たちも彼らに手を振った。そして皆がたがいに写真を撮りあった。

日本の捕鯨関係者はイギリスの報道機関に対して大きな不信感を抱いているため映像をおさめる許可を得るには相当の説得を要した。それ故、ドキュメンタリーを鯨類研究所に見せた時、幾人かのメンバーがこれ程客観的な外国のドキュメンタリーは見たことがないと言ってくれた時は胸を撫でおろす思いだった。(これは全てBBCの成果である)

五ヶ月間の船上生活から収穫があったかと何度か質問を受けた。陸の人には一度はやらせてあげたいなあ、と答えてきた。そんなにいいなら何故もう一度行こうとしないのかと聞いてくる奴が一番やっかいである。

## IWC 総会 プラスパフォーマンス

### 大西睦子

鯨料理店・徳家経営

今年五月、アイスランドで開かれたIWC総会にオブザーバーとして初めて出席した。出発の前日板長に、醤油とうどんとトロ口昆布を、出来るだけ軽い容器に入れといて頼んだ。「おかみさん、もしかしたら何かやりはんのでっか、それはあぶない、鯨料理店のオーナーや云うだけで危害うけるかわからへんのに」。「大丈夫、危ない思うたらやめるわ、心配せんとまかしとき」。そんなやりとりの翌日、心配そうな板長の目を背中に感じながら、例の品とありったけのへそくりをバックに放り込み着物と帯がぎっしり詰まった重いトランクを押して店を後にした。

開会初日、初めての国際会議出席のためか少々興奮気味。それに着物が少し派手なもの気になる(実は二十年前につくった緋縮緬に花の刺繍をした着物で出席した)。会議は-host国アイスランドの漁業大臣の挨拶で始まった。民間オブザーバー(NGO)の席は、中央左側に五十席ほど設けられてあり、私は真ん中後方に陣取る。聞くところによると、NGOはほとんどが環境保護団体、いわゆるグリーンピースなど捕鯨反対の人達で捕鯨賛成のNGOは私一人らしい。彼等は着物を着た私を異様なものを見るように、何やらひそひそとげげんそうにこちらを見ては話をしている。言葉の解からないのはこんな時便利なもので、私は彼等に向かって思いっきり愛想よく「やあやあ」と手を振る。仕方なく会釈が帰って来た。どうやら危害は加えないらしい。会議は無線で同時通訳が聞けるので有難い。日本の調査捕鯨の成果はさすがだと感心したり、沿岸小型捕鯨の人達の窮状もよくわかるとか云っている。このままだと良い結果が出るかも知れないと思う。会議はまじめに出席し、合い間をぬってぼちぼちパフォーマンスの準備だ。アイスランドの捕鯨業者ロフトソン氏や米国ロビーストのマクノウ氏を紹介してもらい、鯨肉の手配やコックの手配、会場の設定などで大忙がし。一方、会議の方は進むにつれて日本の立場は段々悪くなり、捕鯨再開という我々の期待を裏切る結果で終了した。会議の終わった翌日、ホテルのレストランで外国の出席者を招待し、鯨料理のランチパーティーを開いた。はたして何人くらい来てくれるかと心配していたが、予定の三十人の席はすぐにいっぱいになり急きょ席をふやしてもらった。途中うどんが足りないとかワインが出

すぎるとかコックもウェイター也大わらわ。大盛況のうちに三時間のパーティーは終わった。「おかみさんやったね、バンザイ!!」と叫んだのは取材に来ていたロンドン駐在の日本人記者達だった。「イギリスで鯨料理なんか食べようものなら徴役もんですよ。いやぁー胸がすっとしたな」と久しぶりの鯨ステーキをほおばりながら、一人がそう云った。私はきれいに平らげられたテーブルを眺めながら、おいしい物は誰が食べてもおいしいんや、口で云うてもわからへん、やっぱりやってよかったと満足感で一杯だった。帰り際、パーティーの成功に感激したロフトソン氏がアイスランド流の挨拶だと云って私の頬に「チュッ」とした時のひげの感触がとても心地よく、印象的であった。これで板長に良いみやげ話が出来たと内心ほっとして、念願の氷河見物に出かけたのでした。

## ナンタケットの鯨博物館

石津謙介

ファッションコンサルタント

正直な話「勇魚」の毎号を読んでいると全くユーウツになる。IWCの国際会議なんて、てんでお話にならない。文明人、文化人同志がお互いに、本当のことを話合っているとは、私には思えない。グリーンピースの悪口でも言おうものなら、個人的にもとんだトバッチリを受けそうで、つい「触わらぬ神に祟りなし」と逃げてしまう。そんな私に自分ながら恥かしい思いである。

昨年、アメリカの東海岸にある昔の捕鯨基地、「ナンタケット島」に遊びに行った。ここにある小さな鯨博物館が面白いと聞いたから。小さな島だから観光客だけで持っているらしい。成程、ほんとに小さな建物だが、中に展示されている道具類や、鯨の油をとる設備など、誠に面白い。臆面もなく、いかにアメリカ人達がメチャクチャに世界中の鯨を追い廻し、殺した鯨から油を採って、終わったら何もかもみんな海に投げ捨てて。そんなことが一目瞭然。平気で見せてくれる。自慢している。そんな当時の「鯨成金」の家があって、島中でナンバーワンのホテルになっている。その名前が面白い。「コフィン亭」という。コフィンとは棺桶のことで、どうやら彼の名前らしい。勿論、仇名だろうが。このホテルの一番いい部屋を所望して、私一人で泊った。実はこの部屋は因縁つきの部屋で、幽霊が出るという。そこで、きっと鯨のユーレイに違いないと思ってわざわざ日本から出掛けた訳である。高い天井から大きな窓に下がったカーテンの重いこと。これに触っただけで何となく、何かが出て来そうな気がする。マッコウ鯨のお化けでも出てくれれば、と手ぐすね引いて待っていたんだが、見事に空振り。少々寝不足気味だったが、翌朝、ラズベリーの畑に入って、収穫を手伝うことになっていたのだから、迎えの車に乗ったら、運転手のオバサンが「そんなユーレイなんて出るもんですか、よかったら今夜、独り者の私の家に泊まって見なさい。大きな鯨が出て来てアンタを押しつぶすかもよ」と大声で笑ってウインクする。成程七・八十キロもあろうかと思うこのオバサン、可愛い名前前でエバというのだと、とてもやさしい声を出す。

それは別として、私にはあのナンタケットの思い出は、あのオンボロの鯨博物館とそれだけで島民全部が食べているようなこの島の住民、こんなアメリカ人ばかりだったら、IWC会議ももっとモノわかりはいいのになぁと。人間は

やはり、人間同志が、キザな人情論や、動物を神様のようにあがめることが人間的だと思っているそんな偽善者共。そして、数をタテにとって暴論をはく奴等を別にして、もっと冷静にこの地球のことを語り合える世界を作りたいなぁと思うと、とたんにムカムカして、よし俺は死ぬまで日本人の捕った鯨を食い続けてやるぞと、そんなやせ我慢の毎日です。

洒落たエッセイを書くつもりが、とんだ下品なハツ当りになって申訳ありません。